

eX.19

川島素晴作品個展

《Action Music》

2013年3月21日（木）19時

杉並公会堂・小ホール

助成：芸術文化振興基金 財団法人 ロームミュージックファンデーション

2007年以來6年間、18回に及ぶ様々な現代音楽企画を遂行してきた eX.（エクストット）ですが、主宰者である川島素晴と、山根明季子の二人展形式の回も2度ほど行ってきました。このほど、第19回を川島素晴個展、第20回を山根明季子個展とすることで、ひとまずの集大成を示したいと考えております。

今宵開催するのは、川島素晴作品個展《Action Music》です。

1994年に「演じる音楽＝Action Music」を創作の根幹として掲げて以来、それに基づく独自の音楽世界を探求してきた川島ですが、今回は初期作品の17-8年ぶりの再演を含んでいます。また、1991年のアイデアである《Exhibition》（一音を一作品として展示する）も上演しますので、大学入学前から書下ろし最新作に至る22年間の創作を俯瞰することとなります。

「演じる音楽」とは、演奏行為単位の接続を音楽構築の基礎に据える考え方で、「演奏行為の共有体験化」が前提となります。つまり、見て、体験して、はじめて意味をなすものとなるわけです。

ですので、本日は、できるだけ、舞台を「見て」、全感覚的にご体感頂ければと思います。

（いつもは長い解説原稿を書く私ですが、今回は必要最低限にとどめました。）

それでは、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい。（開演アナウンスも作品の一部です！）

川島素晴

《《《プログラム》》》

開演アナウンス: 曾我部清典

<オープニング> ◆Fly High! —from the North Island (2012)

euph: 小田倉翔 北田志織 tuba: 星野高大 島崎智寛
(シンセリアート・ウインド・オーケストラ)

◇Exhibition Ie (2013 / 初演) 「夜の構図」

1) ◆フルートソロのためのエチュード「沼宮内伝説」(2006)

fl: 多久潤一郎

2) ◆マわリンバ (2007/2013)

fl: 多久潤一郎 mar: 神田佳子

◇Exhibition Ie (2013 / 初演) 「対立の構図」

3) ◆ポリプロソポス III (1995)

vn: 亀井庸州 valve-slide trp: 曾我部清典 筆箒: 中村仁美
声: 川島素晴 timp: 神田佳子

-----<休憩>-----

4) ◆視覚リズム法 III / 2 つの間奏、終結を伴う変奏曲第 2 番 (1996)

t.sax: 大石将紀 perc: 神田佳子 actor: 山根明季子

◇Exhibition Ie (2013 / 初演) 「干渉」

5) ◆三巳一体 (2013 / 初演)

筆箒: 中村仁美 ob: 林憲秀 bsn: 塚原里江

◇Exhibition Ie (2013 / 初演) 「群像」

◇Exhibition Ie (2013 / 初演) 「虚像」

6) ◆Manic Psychosis IV (2006 / 日本初演)

picc: 多久潤一郎 vn: 亀井庸州 ob: 林憲秀 trp: 曾我部清典
a.sax: 大石将紀 hrn: 里田泰昭 bsn: 塚原里江

<曲間随所に上演> ◆Exhibition Ie (2013 / 初演) [出演者全員]

《《曲目解説》》》

◆Fly High! —from the North Island (2012)

昨年、某大学で私が担当している講義「楽器法」の際に、楽器紹介で参加してもらったことのお礼として作曲。アンサンブル・コンテストの自由曲として用いることが目的だったが、それにしてはかなり難易度の高い作品となってしまった。(私の作品全体の中では、珍しく「メロディ」が存在する等、一応は、目的に適うものを意識したつもりではあるが…)冒頭に次々提示される楽想が、徐々に短くなる、というフォーマットとしては、基本的に、例えば本日最後の演目《Manic Psychosis IV》等とも共通するのだが、そこに、カンタービレな楽想が介入し、且つ、それが徐々に激しい楽想と融和していく、という、自分としては新しい構造を示している。題名は、初演し、今回も演奏してくれる4名の名前から、「高」「翔」「北」「島」という具合に1文字ずつ採ってつけられたもの。

◇Exhibition Ie (2013 / 初演)「夜の構図」

《Exhibition Ie》の構想である、「一つの響きを一つの作品として提示する」というものは、大学受験時代に既にあり、未演奏の連作《Exhibition Ia》(1991)が存在している。これ自体は未演奏だが、私の作品個展を開催する折には、可能な限り、この《Exhibition Ie》の構想を実行してきた。今回は上演したものとしては4回目のものである。音楽作品は本来、時間軸上に構築されるものだが、例えば美術作品というものは、不変な状態を提示することも作品として鑑賞され得るわけで、音を発する演奏家をオブジェとして見立て、一つの構図を作品として提出することは、美術を鑑賞することに準えるなら特別なことではないはずだ。美術と異なる点は、視覚情報のみならず、音の関係、発音している状態そのもの、といった、そこに提示されている全ての「音楽的情報」をコンセプトに組み込むことが可能だということで、私にとってこれはあくまでも「音楽作品」である。

今回は、このような作品を5つ用意した。まずは「夜の構図」である。様々な角度から「夜」のメタファーを盛り込んでいる。

◆フルートソロのためのエチュード「沼宮内伝説」(2006)

2006年に、岩手県沼宮内地方の大蛇伝説を盛り込んだ作品を、との依頼を受けて千葉純子氏のために作曲。その当時は、この伝説そのものを調べてもなかなか情報が出てこなかったが、今回、インターネットを検索したら、容易に知ることもできたし、なんと関連グッズまで販売されていた。(特に、姫を萌えキャラに仕立ててチーズクレープを販売していたのには驚いた。)話の内容はこうである。

「今からおよそ1200年前のこと。情け深い長者には、欲深な妻がいた。その妻は崇りで大蛇となる。大蛇は暴れまわり、あたり一面を大きな沼にしてしまう。村人たちはその大沼に神社をつくり、神楽をあげて大蛇を鎮めることとした。祭りに際して若い娘を要求され、ある長者の娘(寄寿姫)に決まる。寄寿姫は大蛇にうろたえず、観音経を読み、大蛇に投げつけた。大蛇は天に召され、寄寿姫は観音に仕えて村を守り続けた。」

音楽教室の場での上演を想定したものとしては特殊奏法に満ちた過激な作品かもしれないが、私としては珍しく、このような題材に即して、その内容を伝える目的で「判り易い」楽曲を作曲したつもりである。

今年が巳年であることは偶然であるが、今宵の後半で初演する新作が、やはり蛇と関係があるのは、この作品を選曲したことの影響もあるかもしれない。

◆マわリンバ (2007/2013)

マリンバ奏者の片岡綾乃、フルート奏者のコノール・ネルソン両氏によるデュオからの依頼により作曲。確か、ちょうどその時分には、女子高生等が携帯メールで「わ」等、小さな文字を頻繁に使うようになったギャル文字ブームも下火になった頃ではなかったかと記憶している。(もちろん、いまだに使われ続けてはいるようだが。)私は、ほんのちょっとした洒落を発端にして、そのアイデアで作曲する、ということをしばしば行う。それは、アイデアの出発点は何でも良い、という意識の表明でもある。この作品は、文字通り、マリンバの周囲を「まわる」曲である。マリンバという楽器は、低音域から高音域に移動すると、下行して元の場所に戻るのには移動時間が必要である。そのような楽器の物理的特徴を逆手に取ったものであり、後ろに控えるフルーティストは、高音域から低音域に移動する際に、マリンバの反対側を移動するマリンバリストに代わって音を奏でる。

初演時は5オクターヴマリンバを想定して作曲したが、今回の演奏者の所有楽器に合わせて音域を変更した版を作成、本日はそのバージョンでの初演となる。音域が狭くなった分、回転数が増したことも影響し、回転の負担は大きくなった。途中、奏者の目が回っているのは、演技ではなく、リアルな状態である。

◇Exhibition Ie (2013 / 初演) 「対立の構図」

本日の《Exhibition》の2作品目。2つの群は、楽器構造等、様々な観点で対立軸を設定されている。

◆ポリプロソポス III (1995)

題名は、多面性を意味するギリシャ語である。「演じる音楽」という概念を提唱してすぐに、「素早くシンクロして動く音程構造」「特殊奏法を主体とした音色のネットワークによるリズム構造」「様々な演奏行為を伝統との距離を軸に体感するヘテロフォニー構造」という3つの構造視点を考え、それらを順に示しつつ徐々に攪拌、融合していく作品《ポリプロソポス I》を発表した。

今回の作品《ポリプロソポス III》は、その延長ではあるが、更に、グリッサンドを巡る「視覚と聴覚」の構造が加わっている。また、グリッサンドを主体とすることで、「素早くシンクロして動く音程構造」は、「グリッサンドによって常に変動するハーモニー」に置き換えられている。

ここで用いられている、4つの楽器(ヴァイオリン、ペダル・ティンパニ、箏、ゼフィロス=曾我部氏考案のヴァルヴとスライドを併せ持つトランペット)と声は、それぞれに伝統も構造もバラバラなものである。唯一の共通点は、グリッサンドが得意である、ということであるが、しかし、グリッサンドを演奏する際に生ずる視覚性については、それぞれに異なった様相を呈している。例えばヴァイオリンであれば、グリッサンドの音の動きは、そのまま視覚的な動きと連動するが、声は、外見上はほとんどそれがわからない、といった具合である。

初演時も声のパートを自ら上演したが、今回、再び自演するに際し、18年前の自分自身の過酷な指定に苦しめられた。奏法変更を要求したい演奏者の気持ちと、指定通り実行して欲しい作曲者の気持ちとの挟間で揺れ動いたが、どうにか、老体にムチ打って、18年前の演奏を再現することができそうである。

(なお、ヴァイオリン以外は初演時のメンバーと同じである。皆さん、18年間お変わりなく羨ましいです。)

◆視覚リズム法 III / 2 つの間奏、終結を伴う変奏曲第 2 番 (1996)

《視覚リズム法》という題名は、大学時代の師である近藤譲氏の作品と同一のものを拝借しているが、コンセプト、内容は全く異なっている。ここでは、視覚と聴覚の齟齬、といった問題を中心に扱っており、この作品は、最も端的にそのことを実行している。題名の通り、「主題」「間奏 1」「第 1 変奏」「間奏 2」「第 2 変奏」「終結」という段取りで進むのだが、実は、「主題」と「変奏」は、音楽的にはほぼ同一の内容となっている。ただし、「主題」では、打楽器奏者が暗幕の後ろで見えない状態となっている。「第 1 変奏」は、暗幕を取り除いた状態で、全く同じ音楽を体験することになる。視覚情報が加わり、体験の本質が変わることで、音楽的に同一であるにも関わらず、「変奏」といってよいような体験の変質がみられるはずである。いわば、体験者の体験が「ヴァリエーション」となるのであり、従来の意味での「変奏」とは全く異なる概念である。「第 2 変奏」では、ここに更に、助演者による動きが加わる。ダンスとも指揮ともつかない、音楽的に視覚情報を上書きするような構造を担うこの助演者の存在は、体験者の体験を、更に異なる質のものに変容させるはずである。(なお、全く同一ではなく、動きが加わることにより、字義通り、若干の「変奏」も生じる。)

なお、助演者がかぶる仮面にはヴェネツィアの、石を敷き詰めた創作楽器にはニースの海岸の、それぞれの思い出が反映している。

◇Exhibition Ie (2013 / 初演) 「干渉」

《Exhibition》3 作品目。音の干渉、楽器同士の干渉、身体的状態が発音に及ぼす干渉、といった、様々な観点での「干渉」が観察されるはずである。

◆三巳一体 (2013 / 初演)

正直な告白をするなら、今回の演奏会のための新作として構想したこの「ダブルリードトリオ」は、たまたま、この 3 つの楽器が、他に乗り番が無かった、ということに由来する偶然の産物である。ダブルリード＝二枚舌＝蛇、という連想から、3 つの楽器を蛇に見立てるアイデアも、編成を決定してからのものであり、今年が巳年であったことも、この偶然の構想を助けている。それにしても、これらの楽器は、同じダブルリードという発音原理でありながら、大きさや構造の面で、著しく異なっている。三者三様の主張を持った異なる「蛇」が、決闘を行いつつ一体化する様子を描いたもの(?)であり、前半に上演した《沼宮内伝説》のエコーでもある。

近年の私は、「音楽作品とはいったい何なのか？」という問いを伴う作品を多く手掛けている。この作品も、そういったシリーズの一環である。

◇Exhibition Ie (2013 / 初演) 「群像」「虚像」

《Exhibition》4 作品目の「群像」は、その名の通り、多くの奏者によって描かれる「群像」そのものである。続いて上演される「虚像」は、その群像がかりそめの姿であることを示唆している。

◆Manic Psychosis IV (2006 / 日本初演)

「ミュージック・フロム・ジャパン」の委嘱により作曲され、2006年にニュー・ヨークで初演された。7つの楽器がそれぞれソロ回しを行うが、徐々に重なりあっていく。このような発想は、既に多くの作品で実行していたし、2003年に作曲した《Manic Psychosis III》は、ピッコロ、クラリネット、トランペット、バスーンの4重奏であり、《IV》の編成と重なるピッコロ、トランペット、バスーンについては、かなりの部分、素材を共有している上に、譜面台を横に並べて進行するアイデアもそこで既に実行していた。しかし、7重奏の編成となることで、全体のバランス等、様々な点でこのアイデアの美点を最も効果的に具現できていると感じている。

ところで、この作品の上演が終わった後、シンポジウムが行われた。質問者からの「日本文化の影響は？」との問いに、「本日上演された曲の中で、私の作品は、ある意味で最も日本文化の影響を受けていると思います。なぜなら、現代の日本文化で最も国際的な評価を得ているものは、アニメーションだからです。」という趣旨の発言をした。この発言はアメリカ人には受けただけだが、よくよく考えてみれば、ジャパニメーションというよりは、アメリカのカートゥーンの方が近いかもしれない。

初演の当時、実は思い至っていなかったことではあるが、この作品が7名によって演奏されることは、今にして思えば、とても意味の深いことかもしれない。7色のシャツによってレインボーカラーを衣装にしたことには、この時代に寄せる想いも反映している。

===== 川島素晴 / Motoharu Kawashima =====

1972年東京生まれ。東京藝術大学卒業、及び同大学院修了。近藤譲、松下功の各氏に師事。1992年秋吉台国際作曲賞、1996年ダルムシュタット・クラークニヒシュタイン音楽賞、1997年芥川作曲賞、2009年中島健蔵音楽賞等を受賞。1994年以来、「演じる音楽」を掲げて作曲活動を行っている。国立音楽大学（専任）、尚美学園大学、東京音楽大学各講師。いずみシンフォニエッタ大阪プログラムアドバイザー。日本作曲家協議会理事。2013年度芥川作曲賞審査員。

告知

<experiment> 2013年3月24日(日)17時半～20時(←チラシ記載の時刻を変更しました！)

@STUDIO 1619 500円 定員20名(予約者優先入場制)

*本日上演した作品を中心に、川島素晴自身による自作解題を行う。

(本日、まだ予約受け付けておりますので、ご来場をご希望の方は、受付にてお申し付け下さい。)

出演者略歴

小田倉 翔 ユーフォニアム

柏市立柏高等学校 卒業。現在 尚美学園大学 芸術情報学部音楽表現学科管弦打楽器コースでユーフォニウムを専攻(新3年)。

北田志織 ユーフォニアム

春日部共栄高等学校 卒業。現在 成城大学 社会イノベーション学部 心理社会学科 2年(新3年)

星野高大 テューバ

柏市立柏高等学校 卒業。現在 尚美学園大学芸術情報学部音楽表現学科管弦打楽器コースでテューバを専攻(新3年)

島崎智寛 テューバ

春日部共栄高等学校 卒業。現在 芝浦工業大学工学部機械機能工学科 2年(新3年)

シンセリアート・ウィンド・オーケストラ sinceriertwindorchestra.web.fc2.com/

足立区立第十四中学校の卒業生を中心に2011年4月に創立した吹奏楽団。メンバーは東京・千葉・埼玉・神奈川など関東圏の高校生～大学生が中心となっており、現在は30名超で活動している。毎年6月には定期演奏会を開催しており、今年の6月15日には第三回定期演奏会を予定している。【シンセリアート：Sinceriert】とは、誠実さ〈英：Sincerity〉心・気持ち〈英：Heart〉を意味する言葉を組み合わせた造語で、芸術〈英：Art〉にちなんでいる。楽団での音楽活動において、最も大切にしたい信念をあらわしている。

大石将紀 サクソフォン

1999年東京藝術大学卒業。同年、同大学大学院修士課程に入学し、2001年に修了。同年、渡仏しパリ国立高等音楽院に入学。02年から2年間文化庁派遣芸術家海外研修員として研鑽を積む。在学中はフランス国内のコンクールで入賞(U.F.A.M国際コンクールソロ部門名誉首席一等賞ほか)。04年アムステルダム音楽院に短期留学。05年にパリ国立高等音楽院サクソフォン科、室内楽科を、06年には即興演奏科を全て最優秀の成績で卒業。さらに05年よりパリ国立高等音楽院第3課程室内楽科(サクソフォン四重奏)に進み07年に修了。これまでに安田生命クオリティオブライフ文化財団、メイヤー財団などから助成を受ける。07年トキョーワンダーサイト、08年には東京オペラシティ文化財団主催「B→C」に出演、また10年にはNHK BSクラシック倶楽部において「ガーデン・オブ・ラブ 大石将紀スタジオコンサート」として特集されるなど幅広く活動している。東邦音楽大学・大学院および洗足学園音楽大学非常勤講師。

亀井庸州 ヴァイオリン

ヴァイオリンを5歳、琴古流尺八を18歳より始める。2000年ごろより、主に同世代の作品初演を専門に活動を開始。2004年東京音楽大学卒業後、20世紀以降の音楽を集中的に学ぶため2005年よりベルギー王立リエージュ音楽院に在籍し、元クセナキスアンサンブルメンバーである大久保泉氏にヴァイオリンを、また、20世紀の室内楽をジャン＝ピエール・プーヴィオン、フリーインプロヴィゼーション、アドリブをそれぞれギャレット・リスト、ミッシェル・マッソーの各氏のもとで学び、両氏とはベルギー国内各都市での公演にて共演した。2007年帰国後は日本国内においての同時代作品の演奏を主眼に活動しており、主に室内楽において年間数十回にのぼる公演に携わっている。これまでの主要な参加企画として、2008年のex.7湯浅譲二作品個展、東京オペラシティコンサート2009および2012関連公演、武生国際音楽祭、四人組の会(2011於津田ホール)、ポリニー・パースペクティブ2012(於サントリーホール)があり、湯浅譲二、ヘルムート・ラッペンマン、池辺晋一郎、細川俊夫、三輪眞弘、松平頼暁、ジャコモ・マンゾーニら各氏の室内楽作品を作曲家本人との共同作業にて初演、および再演している。

webサイト：<http://yoshukamei.com/>

神田佳子 打楽器

4才よりエレクトーン、11才よりドラムを始める。1995年東京芸術大学打楽器専攻卒業、及び1998年同大学院修士課程修了。1996年、1998年ドイツ：ダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会に参加し、奨学生賞を受賞。これまでに、ソリストとして東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団等と共演や、国内外の音楽祭、NHK「FMリサイタル」、TV朝日「題名のない音楽会」などに出演。大学院在学中より開催しているソロ・リサイタルシリーズ「音、生まれる」や、東京オペラシティ主催リサイタルシリーズ「B→C」(1998)等のソロ活動に加え、PERCUSSION TRIO [The Birds]、Ensemble contemporary α、アンサンブル・ダム等々のアンサンブル活動も積極的に展開。一柳慧、松平頼暁、高橋悠治、近藤譲等をはじめとする多くの作曲家の作品を初演し、若手作曲家との共同作業も多く行ってきた。また、高橋悠治プロデュースの伝統楽器バンド「糸」、古楽集団トロヴァトーリ・レヴァンティのメンバーとしても活動するほか、正倉院復元楽器「方響」の演奏、美術やダンス等とのコラボレーションや様々な分野での即興演奏も行う等、時代やジャンルを超えた打楽器演奏の可能性にもアプローチしている。2002年ビクターエンタテイメントより、ヴァイオリンとパーカッションのCD『C⇄Yプロジェクト「ソルト&ペッパー」』をリリース。2005年Bon-Kan Media works のレーベルプロデューサーとして、TANAKANDA、Percussion Trio [The Birds]のCDをリリース。

里田泰昭 ホルン

天理高等学校、大阪音楽大学卒業。ホルンを猶井正幸、近藤望の両氏に師事する。ピアノを恒川裕子氏、作曲を安藤幹彦氏、指揮を松尾昌美氏に学ぶ。ヘスポスのホルン独奏曲「コルナ」、グロボカールのRes/As/Ex/Ins-pirer、江村夏樹の「樹の曲」(ホルン独奏版)等を日本初演。ホルン奏者としての活動の他、アレンジャー、指揮者としての活動の範囲を広げ、最近では吹奏楽の指導も積極的に行っている。里田泰昭のホームページ<http://www.eonet.ne.jp/~hornpiano/>

曾我部清典 トランペット

1952年愛媛県生まれ。東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。ムジカ・プラクティカのメンバーとして芸大在学中より国内外の新作初演に数多く携わる。ALMレーベルより4枚のソロCDをリリース、レコード芸術・音楽芸術などで特選盤の評価を受けた。2001年より度々ヨーロッパ主要都市でソロリサイタルを行う。現在、ピアニスト堀江真理子、オルガニスト飯靖子とのデュオリサイタルシリーズ進行中。川島氏の作品は、1995年に作品を書いて頂いてから18年の間に18曲目（マニックサイコシスIV）の演奏曲となる。他に、プラスエクストリームトウキョウ代表、上野の森プラスコンサートマスター、双子座三重奏団・コンテンポラリーαのメンバー。洗足学園音楽大学講師、日本トランペット協会常任理事。http://www.jade.dti.ne.jp/~ebakos/

多久潤一郎 フルート

東京藝術大学在学時より『アンサンブル・ボワ』のメンバーとして多数の現代音楽の演奏に携わり数々の特殊奏法を会得、または開発する。その技術を世に示すべく大学の後輩達と次世代型フルートトリオ『マグナムトリオ』を結成。特異なスタイルはすぐさま反響を呼び、日本ツアーに加え、イギリス、韓国でも公演を行い、今夏にはカナダのフェスティバルから出演のオファーを受けている。卒業後は民族音楽にも興味を向け、民族楽器オーケストラのために作品を書いたり、またフルートで各国の民族楽器の伝統曲を演奏する『east x west』というリサイタルシリーズを続けている。「アンサンブル・コンテンポラリーα」メンバー。

塚原里江 バスーン

東京芸術大学を経て、1994年同大学院修了。大学在学中「モーニング・コンサート」に出演し佐藤功太郎指揮、東京芸術大学管弦楽研究部オーケストラと共演。1991年、長野アスペン音楽祭にて奨学金を得て、翌年アメリカコロラド州アスペン音楽祭に招待され、ハロルド・ゴルツァー氏に師事。1994・95年、桐朋学園大学嘱託演奏員、また1997年、桐朋学園短期大学嘱託演奏員。現在、フリーの演奏家としてオーケストラ、アンサンブル等と共演する傍ら、COMPOSIUM'98におけるG.リゲティ作品演奏会をはじめとして、様々な現代音楽の演奏会に出演。幅広い演奏活動を行っている。これまでに、ファゴットを岡崎耕治、中川良平、室内楽を中川良平の各氏に師事。

中村仁美 箏

箏を中心にして、雅楽古典曲・現代作品の演奏を行う。箏、楽箏、左舞、雅楽全般を大窪永夫、芝祐靖、上明彦など各氏に師事。東京芸術大学大学院音楽学専攻修了。雅楽演奏団体「伶楽舎」メンバー。国立劇場公演('86~)、八ヶ岳音楽祭('94)、タンゲルウッド音楽祭('96)、ウルティマ現代音楽祭('97, '00, '05)、ミュージック・フロム・ジャパン(MFJ)音楽祭('02, '04, '08, '10)、ミュージック・シェアリング邦楽レクチャーコンサート('05~毎年)、コロムビア大学(米)公演・ワークショップ('06~毎年)、文化庁「本物の舞台芸術公演」('07~毎年)、ニューヨークジャパソサエティ公演('08)、MITO音楽祭('09)などで演奏を行っている。一柳慧、伊左治直、吉川和夫、芝祐靖、中川俊郎、細川俊夫、増本伎共子、三浦寛也など現代作曲家の作品を多数初演するほか、様々な和・洋楽器、オーケストラとの共演、舞踏とのコラボレーションなど多彩な活動を続けている。また「葦の声」('92年~)「葦の風」('03年~)と題した箏リサイタルでは、箏の独奏曲やアンサンブル曲を多数委嘱初演し、ソロ楽器としての箏の魅力を開拓している。1998年度文化庁芸術インターンシップ研修員。2002年に伶楽舎メンバーとして中島健造賞特別賞受賞、2010年に松尾芸能賞新人賞を受賞。国立音楽大学、沖縄県立芸術大学非常勤講師。CD「ひちりき萬華鏡」(ALM、2006)、「胡笳の声」(ALM、2013年3月リリース)。

林 憲秀 オーボエ

東京生まれ。桐朋高校(普通科)在学中よりオーボエを本間正史に師事。桐朋音大入学後に渡米、ニューヨーク・マンハッタン音楽院に編入し、オーボエをジョゼフ・ロビンソンに師事。同校在学中よりマンハッタン・バロック、アンサンブル・ハートレンチング、ニューヨーク・ユースシンフォニー等で活躍。ロングアイランド・ユースオーケストラにはコーチ兼ソロオーボエ奏者として、世界ツアーに参加。ヨーロッパ、アジア各国にてコンサートに出演。その後ニューヨーク州立大大学院に進み、奨学生としてオーボエをロバート・ポッティに師事。修士課程終了の際、同校よりアルビン・プレム賞を授与され、記念コンサートに出演。同年パーチェス交響楽団の定期演奏会にて協奏曲デビューを飾る。その後も、ニューヨークフィルハーモニックのエキストラ、ソロオーボエ奏者バート・ルカレリ氏のアンサンブルにイングリッシュホルン奏者として参加するなどして活躍。その他ニューヨークのラジオ局「WQXR」主催のレクチャーコンサートに師のロバート・ポッティと出演、好評を得る。ニューヨーク州立大スーニーブルック校博士課程にて研鑽を積みながら、助手として後進の指導、学内の仕事にも従事。また、メキシコ州立交響楽団の首席オーボエ奏者としても活躍し、メキシコ・サカテカス音楽祭にソリストとして招聘された。帰国後は株式会社花曜社代表を務める傍ら、アマチュアオーケストラや、アンサンブルの指導を行っている。

山根明季子 アクター

1982年大阪生まれ。作曲家。音を視る、音で造形をデザインするというコンセプトで「ポップな毒性」をテーマに作品を描く傍ら、実験音楽作品のパフォーマンス等も行っている。京都市立芸術大学卒業、同大学院修了。プレーメン芸術大学派遣留学。日本音楽コンクール第1位、芥川作曲賞受賞。これまでにNHK交響楽団、読売日本交響楽団などのオーケストラや国内外のアンサンブル、多くの演奏家によって作品が委嘱、また上演されている。2011年京都にて作品個展及びサウンドインスタレーションを行う。同年avant dossierよりCDシングル「水玉コレクション No.06」をリリース。2013年2月福島、ニューヨーク及びワシントンでMFJ委嘱「水玉コレクションNo.13」上演、8月サントリー芸術財団委嘱の琵琶協奏曲「ハラキリ乙女」初演等。
http://akikoyamane.com